

4. 透明な降着円盤

透明な円盤とは、発生した X 線が、吸収されことなく直接円盤の外に出ていく場合である。不透明な場合と同様、計算されたすべての解は、外端から内側に向かって進むにつれ、SADM 解から次第にずれていくという性質を示す。しかし透明な場合は、外端で適切な境界値を採用すれば、ブラックホールまでつながった円盤全体の構造を決めることができる。図3には、このような透明な円盤の温度 T と厚み H が示されている。得られた数値解は、点線で表わされている SADM 解と相当に異なっている。円盤の温度は非常に高く、従って幾何学的厚みの大きい構造となっていることが注目される。

雑報 1

小惑星の新しい名称 (1000)~(1002)番の小惑星名は小惑星発見史に登場する3人を記念して Piazzia, Gauss, Olbersia と命名されていた。登録番号が増え 2000 番に達したので、IAU 第20委員会(小惑星・彗星・衛星の位置と運動)では次のメンバーによる特別命名委員会を 1976 年夏に発足させた。

V. K. Abalakin, P. Herget (委員長), L. Kohoutek, B. G. Marsden, J. Schubart, C. J. van Houten, P. Wild

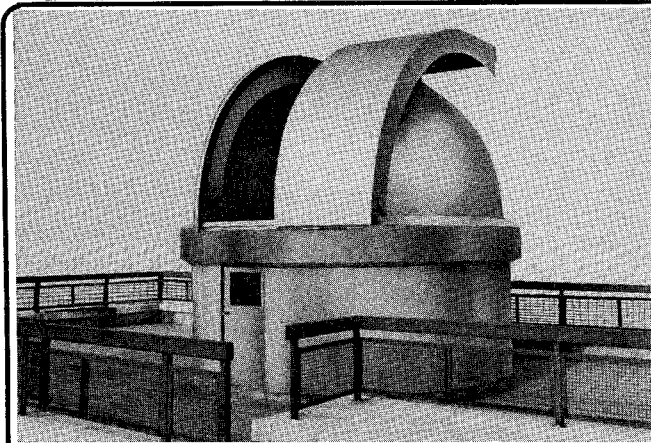
5. おわりに

この研究から、降着円盤全体の構造を与える定常解は、境界値が限られたきわめて狭い範囲にある場合にのみ存在することが明らかになった。境界値がその範囲外にあるときは、円盤はどのような状態になるのであろうか。2つの可能性が考えられる。

- (i) 円盤は境界値を自己調節し、定常状態を達成する。その結果、境界値は狭い範囲内のある特定な値に落ち着く。
- (ii) 定常状態という仮定を、もはや適用できない。円盤の構造は、時間とともに変化する。

いずれの可能性が実現されるかを知るには、時間を含んだ方程式を適切な初期条件で解かねばならない。

数回の会合で検討した後、次のように 2000 番前後の名称が確定した。(1996) Adams, (1977) Leverrier, (1998) Titius, (1999) Hirayama, (2000) Herschel, (2001) Einstein, (2002) Euler, (2003) Harding, (2004) Lexell, (2005) Hencke 5月に東京で開催された IAU 第81回シンポジウムは東大名誉教授萩原雄祐先生の81才の誕生日と天体力学に関する労著作をたたえるものであったが、この席上アメリカインディアナ大学の Edmondson が(1971) 1955 RD₁を Hagihara と命名したいと申し出ていることが披露され喝采を博した。(富田弘一郎)



← L N-10E 型
25cm 反射赤道儀

- 営業品目
- ★天体望遠鏡ならびに双眼鏡
 - ★天体写真撮影用品及び部品
 - ★望遠鏡各種アクセサリ
 - ★観測室ドームの設計・施工

★総合カタログ
ご希望の方は切
手 300 円同封お
申込みください

ASTRO 光学工業株式会社
 ASTRO 170 東京都豊島区池袋本町2-38-15 ☎03(985)1321